

要 旨

「なぜ」について考える中国の「日本事情」のあり方

— 「個の文化」を構築する授業プランを求めて —

佐藤 淑子

中国では知識偏重型の教育を改革する試みとして、1990年半ばより学習者一人ひとりの情操を養い考える力を育む「素質教育」が推進されてきた。しかしながら、現在も大学の日本語専攻の日本事情教育においては、「日本文化」と呼ばれる多くの知識を与え、短絡的に正解を求める一斉授業が一般的である。そこで、本論では「日本事情」とはどのような科目であるのかを考察し、知識として「文化」を学ぶのではなく、学習者の考えることを重視した中国における指導法を検討した。

1. では、中国の日本事情教育の現状における問題点を指摘し、その根源となっている大学教学大綱をはじめとし、教科書と教師の教育観について考察した上で、2. では日本と中国の「日本事情」という科目が、どのように捉えられているのかについて先行研究を分析した。特に、日本では集団社会様式として捉えられていた従来文化が、1990年代に「個の文化」という考え方が提唱され、現在では、ことごと文化を個人のレベルで統合するという考え方が主流であることを明らかにした。続く中国の「日本事情」についての先行研究において、「個の文化」により学生の対日認識が「反日」から「親日」に形成され、日中両国の改善につながっている面もあるが、多くの教師が固定的で画一的な「日本文化」を知識として網羅的に指導していることに警鐘が鳴らされていることを明らかにした。以上を踏まえて、3. では中国で実践できる「考える」授業を前提とし、一斉授業の問題点に触れ、思考の相乗作用が機能するグループによる協同学習を取り入れることを提案した。加えて、適切な指導法の具体例

をあげ、思考の過程を重視した学習が考えを高め能力を引き出すことに結びつき、社会に出てからも汎用できることについて考察した。

4. では、3. で考察した指導法を応用し、学習者が「なぜ」を問い「なぜ」について考える授業のプロセスを「事実の確認」・「差異の発見」・「『なぜ』の探究」の三つの部分から考察し、「個の文化」を構築していく教室活動について検討した。上記の三つの部分を取り入れ「日中の茶文化」を通して「茶道」と「茶芸」の差異を見つけ、中心課題である「なぜお茶は『道』と『芸』に分かれてしまったのか」を探究することにより、日中両国の価値観について考えさせる授業プランを作成した。

5. では中国における今後の課題として、学生と教師の価値観の転換、教師の育成、教材の開発と指導法、評価法の4点を述べた。